漢字の接辞的用法に関する一考察

——形容詞的意味をもつ漢字の接辞的用法について——

加　納　千恵子

1.　はじめに

漢字の特性としてよくあげられるものの一つに「造語力」がある。時代とともに言語が変化する時，そこには新しい言葉が作られるという現象がみられ，その造語のパターンには法則性がある。それらのパターンや法則性を「造語法」と呼ぶが，日本の近代化の過程において，漢字および漢語による造語法は非常な成功をおさめ，多くの新造語を作り出してきた。特に，自然科学の分野の学術用語などにそれが多くみられ，最近急激に増えている自然科学系の留学生の日本語教育においても，この漢字・漢語の造語力を理解させることが効率的な専門日本語の教育の上でかなり重要であると考えられるようになってきた。専門用語をただ片っ端から一つ一つ覚えていくというのでは，膨大なエネルギーと時間が必要であるし，効率もよくない。それらの用語を形作っている構成要素とその造語法を理解することにより，共通の構成要素をもつ別の用語の理解にも応用できるばかりでなく，また日本語全体の中の語彙の体系といったものをある程度摑むことができるようになるという利点もあるのである。

単語がどのようにして作られるかということは，広くは「語構成論」と呼ばれる研究部門の一部をしめているが，阪倉篤義（1966）は，語構成論の扱うべき問題およびその研究の態度について，次の二つを規定している。一つは，「造語」（word-building, word-making）の事実を主に発生的な見地から論じようとする，「語形成論」（造語論）的な立場であり，もう一つは，すでに形成されて存在する言語単位について，これがどのような部分要素の結合によって構成されているかという「語構造」（word-formation）を主に記述的な立場からあきらかにしようとする「語構造論」的立場である。

これまで「語構成」の問題を扱う場合には，後者のような記述的立場が圧倒

的に多かったように思われる。日本語教育の分野でも，日本語の単語の語構造を解析し，それによって単語の意味の理解を助け，語彙教育に役立てようとする試みが始まっており，それは読解教育のための有効な情報にもなると思われる。しかし，単に単語の意味を理解するためだけではなく，その単語を運用する必要がある場合を考えると，前者の発生的な見地からの研究も必要になってくるのではないだろうか。ただし，ここでいう発生的見地とは，過去において言葉がどのように作られてきたかという，歴史的事実としての「語形成論（造語論）」を指すのではなく，むしろ現代日本語において使用されている造語のルールとその実態を探ることを意図している。過去において様々の語を生み出してきた漢字による造語法の中には，現在でも次々と新語を生み出し続けているものとすでに造語力を失いつつあるものとがあり，また造語する際の制約が変わってきているものなどもある。漢字の造語力そのものも昔に比べると低下してきており，外来語の使用にとってかわられる場合も増えているが，漢字による造語法は様々な分野で依然として使われている。そのような漢字による造語のルール，漢字の造語力，といったものの実態を探り，運用上の制約などに関して記述することを広く射程に入れながら，本稿では，漢字の接辞的用法に関して，「大」「新」「悪」などの形容詞的意味をもつ漢字の用法に限って，その造語力および用法上の制約などの実態について考察してみたい。

2. 漢字の接辞的用法

造語について考える時，正確には単純語を作る場合と合成語を作る場合とがあるが，ここでは原則として合成語についてだけ取り上げることにする。新しくできる語のほとんどは既成の語基や接辞を組み合わせたものであり，単純語が作られるケースというのはきわめてまれだからである。しかし，ある語が合成語か単純語かというのも，実は判断がむずかしい場合がある。例えば，「国際化」「機械化」という場合の「化」は，あきらかに合成語を作る接辞的用法の漢字といえるが，「変化」「進化」などというのは，すでに存在する単純語であるとみる立場もある。ただ，「緑化」「激化」「美化」などになると，やはり「緑」「激」「美」に「化」がついたものと考えたほうがこれらの語の中で「化」の果している共通の性質をみるためにも都合がいいように思える。これらの漢字は一字で音と訓をもっていて，「緑（りょく）」は「みどり」，「激（げき）」は「はげしい」，「美」は「うつくしい」という意味を表しており，それぞれ

「みどりになる／する」,「はげしくなる／する」,「うつくしくなる／する」という共通の意味関係を表わしていると考えられる。したがって本稿では，このように共通にみえる漢字の意味関係や用法をあきらかにするために，いちおうこれら全部を考察の対象とすることにする。

合成語を作るという場合には，大きく分けて二つ考えられる。野村（1977）によれば，一つは，語基と語基を組み合わせて複合語を作る場合であり，もう一つは語基に接辞（接頭辞や接尾辞）をつけて派生語を作る場合である。

合成語 {複合語……語基＋語基
派生語……語基＋接辞／接辞＋語基

これによると，接辞の典型的な特徴としては，①単独で語を構成することができず，②語基と結合して形式的な意味をそえたり，③語の品詞性を決定したり（派生機能がある）して，④造語機能が高いこと，ということになる。しかし，この四つの特徴は，これらをそなえているからといって必ずしも接辞だというわけでもなく，また接辞であっても実際には意味が実質的だったり派生機能がなかったりすることもあって，研究者によって見解の分かれるところである。[1] ここでは，主に①と④の特徴を中心に，すなわち単独ではふつう語を形成することができないが，他の語基についてある特定の共通の意味（あるいは品詞性）を付加した語を造り出すという機能をもつ単漢字の用例がかなり数多くみられる場合，それを漢字の「接辞的用法」と考えることにする。

「接辞」とせずに「接辞的用法」としたのは，ある漢字が常に「接辞」として用いられるわけではなく，他にそれ以外の用法がある場合も考えられるからである。例えば，「同窓会」「座談会」などの「会」や「営業部」「運動部」などの「部」は，「会をひらく」,「部によってシステムが違う」などのように，ほとんど同じ意味で単独に使われる場合もある。「大規模」の「大」,「悪影響」の「悪」も，「影響が大である」,「世の中に悪がはびこる」などのような用法がみられる。しかし，このことを理由として，「同窓会」の「会」,「営業部」の「部」と「動物園」の「園」,「先進国」の「国」との間に一線を画したり，「大規模の」「大」,「悪影響」の「悪」と「両陣営」の「両」,「諸問題」の「諸」とが異なる働きのものであるとみなしたりするのは適当でないと考える。この「接辞は単独で語を構成することができない（拘束形式あるいは結合形式である）」という①の点に関しては，水野（1987）の「結合形式であることを，接辞の条件としてあまりきびしく考えないほうがよいのではないか」という立場に賛成する。そこで本稿では，これらをその漢字の「接辞的用法」として一つ

の同じカテゴリーに属する現象として扱うことにする。

3. 漢字の接辞的用法と語基の分類

漢字の接辞的用法は，その機能によって次の二つに分類される。

1) 語基に意味を添加するだけ

2) 意味の添加と同時に，語基のもつ文法的性格（品詞）を変える

「不」「無」などを除く接頭辞的用法のほとんどは1）であると考えられる。接尾辞的用法の中には2）もあるが，全てではない。そして，2）のような機能（どの品詞の語からどの品詞に変えられたのか）をみるためには，語基の品詞分類が必要であるが，そのためだけではなく，漢字の接辞的用法の運用上の制約（どのような品詞の語基につくか，つかないか，など）を考察するためにも，その分類の方法を検討しておかなければならない。

水野（1987）は，語基を体言類・相言類・用言類・副言類・結合類の五つに分類している。[2)]

表(1)	特　　徴
1. 体言類	格助詞「が」を伴って文の要素となる。　ex. 近代・化学
2. 相言類	「な」を伴って連体修飾成分。あるいは体言類・用言類・副言類に属さず「の」を伴って連体修飾成分となる。　ex. 優秀・最後
3. 用言類	「する」を伴ってサ変動詞となる。　ex. 計画・注意
4. 副言類	そのままで連用修飾成分となる。　ex. 全然・絶対
5. 結合類	四つの類のどれにもあてはまらず，必ず接辞等と結合して用いられる。　ex. 積極・合理

表(1)の分類でいくと，5の結合類の語基以外は，同時に二つ以上の類の特徴をもつということがありえる。そこで，4，3，2，1，の順にその特徴を優先させて分類することになっている。例えば，「事実」という語は，格助詞「が」を伴って文の要素になることもできるが，そのままで連用修飾成分ともなれるので，1と4の特徴を兼ね備えている。その場合には4を優先させて副言類とする。「失礼」の場合は，「失礼があってはいけない」のように体言類の特徴をもっているが，「失礼な態度，失礼な人」のように相言類の特徴もみられる。また，「失礼する」のように用言類の特徴もそなえているので，その

中では3を優先させて，用言類とするわけである。

これに対して吉村（1987）は，次の1)～6)の統語機能を基準として，五つに分類することを提案している。[3)]

表(2)	1)～ガ／ヲ	2)～ノN	3)～　N	4)～ナN	5)～する	6)～Pred
1.　N	＋	＋	＋	－	－	－
2.　N'	－	－	＋	－	－	－
3.　AJN	＋－	－	＋	＋	－	－
4.　VN	＋	＋	＋	－	＋	－
5.　ADN	＋－	＋	－	－	－	＋

水野(1987)があげた相言類の特徴をさらに二分した六つの各基準について[＋]か[－]かを判定しているので，五分類がよりすっきりした形にできあがっている。表(1)と(2)とでは，相言類以外の分類はほとんど変わらないが，例えば「優秀」「最後」が表(1)では相言類になっているのに対して，(2)では「優秀」はAJN，「最後」はNと分けられている。

ただし，表(2)のADNについては，何も伴わないで連体修飾ができるもの（基準3）が[＋]のもの）もありえるだろうと思われる。吉村は，ADNが基準3)について[－]であることの例として「＊最近成果」が非文法的であることをあげているが，例えば，水野が副言類としている「事実」についてみると，「事実が／を」「事実の確認」「事実関係」「＊事実なこと」「＊事実する」「事実そのようなことがある」で1)～6)の基準が［＋＋＋－－＋］となり，このままではADNの基準に合わないばかりかどこにも入るところがなく例外扱いしなければならなくなる。ほかに「絶対」も「＊絶対が／を」「絶対の信頼」「絶対多数」「＊絶対なこと」「＊絶対する」「絶対正しいと思う」のように1)～6)の基準が[－＋＋－－＋]となる。したがってADNのための基準3)を[＋－]にすれば，これらをADNとして認めることができることになる。

また，「自由」「危険」などのようなAJNは，「自由の女神」と「自由な女神」，「危険の予知」と「危険な場所」，というようにどちらの形もとれるので，AJNの2)の基準も[＋－]にしておくほうがいいかもしれない。

AJNの2)の基準とADNの3)の基準の判定を[＋－]として，下の表(3)のように直してみると，NとN'，AJN，VN，ADN，それぞれを分けている弁別的統語機能が何であるかが4)～6)の[＋]の位置をみれば，一目瞭然であ

表(3)	1)〜ガ／ヲ	2)〜ノN	3)〜 N	4)〜＋N	5)〜する	6)〜Pred
1. N	＋	＋	＋	−	−	−
2. N'	−	−	＋	−	−	−
3. AJN	＋−	＋−	＋	＋	−	−
4. VN	＋	＋	＋	−	＋	−
5. ADN	＋−	＋	＋−	−	−	＋

る。

さて，漢字の接辞的用法の運用上の一般的制約をみるためには，語基の文法的性格ばかりでなく，その意味的性格にもある程度の分類が必要であろう。ただし，どのような意味分類が漢字の接辞的用法を説明するために有効であるかは，まだ必ずしもあきらかではないので，今後，考察をすすめながら検討していきたいと思う。

4. 形容詞的意味をもつ漢字の接辞的用法

国立国語研究報告56『現代新聞の漢字』[4]の使用頻度の高い漢字の中から，一字で形容詞（訓読み）として使われるものを選び出すと以下のようになる。

大 長 新 高 小 明 正 強 近 安
重 多 少 早 白 広 黒 太 若 古
青 難 優 赤 悪 低 良 深 丸 苦
冷 温 熱 軽 速 細 痛

しかし，これらの全てが，合成語を作る接頭辞的用法といえるほど造語力が高いわけではない。造語力が高いとか低いとかいっても程度の問題であるが，使用頻度の高い用例が比較的多いものということにすると，「大」「小」「長」「短」「新」「高」「低」「多」「少」「悪」などである。

まず，「大」「小」の対からみてみよう。「大」は，「都市」「空港」「企業」といった主に場所あるいは機関などをあらわすNにつけて「サイズが大きい」という意味を表す。「大公園」とか「大遊園地」とかいう一見見慣れない組合せの言葉でも，書いてあればそれなりに意味が分かるので，宣伝広告や看板などによく使われ，造語力が大きい。「大」のこのような用法を「＋N[トコロ]」という運用上の制約として表しておく。行事やイベントなどにつけて「大運動

会」「大謝恩セール」などというのもここに入れる。

同じNでも事柄につける場合には，それほど自由に造語できるわけではない。「大損害」「大事故」など，悪い事柄について「その度合がひどい」という意味を表わすことが多い。人の行為や行為の結果を表すVNにつく場合には，「失敗」「暴落」「混乱」といった悪いこと，「成功」「進歩」「発明」といった良いこと，など比較的広い範囲の意味の語について「その程度，度合が大きい」という意味を表す。そして「大」がつくとその語はもはやVNとしてよりNとしてのほうがよく使われるようになるので，一種の派生機能もあるといえるかもしれない。

ものや人を表すNにつける場合は，「ものすごい」とか「普通ではない」といった意味の強調を込めて「大社長」「大画面」などと使うのであって，ただ「大きい」という意味で「大人間」とか「大電話」などと使うことはできない。また「大規模」のように「大」がついてAJNになるものもある。

自然物や自然現象を表す1字の語につくと，「タイ」という音読みの場合と「おお」という訓読みの場合とがあるが，これは慣用的なものである。「大」と「小」の用法を以下のようにまとめてみると，「大」と反対の意味である「小」の3字語の造語力はそれほど大きくない。「大規模」← →「小規模」のほかは，特別な場合にのみ「大」をつけ，そうでない時は何もつけないというのが普通である。「小」には「こ」という訓読みの用法もあるが，そのほうが慣用表現が多く，むしろ特別な場合に「小道」「小鳥」などと使って，「大」はつけないものもある。

「大」（ダイ）：

＋N［トコロ］	大都市　大空港　大草原　大企業　大会社 大食堂　大会議　大運動会　大バーゲンなど
＋N［ワルイコト］	大損害　大震災　大事故　大疑惑　大問題 大ショックなど
＋VN → N	大失敗　大暴落　大混乱　大渋滞　大論争 大反対　大転換など 大成功　大進歩　大発明　大改革　大恋愛 大賛成　大公開など
＋N［ヒト・モノ］	大社長　大先生　大人物　大画面　大辞典 大ニュースなど
＋N → AJN	大規模

「大」(タイ)：　大火　大木　大海　大陸　大河　大気　[シゼン]
大国　大会　大群　大軍　大量　大金　大差
大病　大食など
「大」(おお)：　大水　大雨　大雪　大空　大風　大島　[シゼン]
大声　大酒　大船　大麦　大物　大柄　大型
大口　大判など
大仕事　大騒動　大道具　大時計　大部屋
大広間　大手柄など
「小」(ショウ)：　小規模
(こ)：　小雨　小雪　小島　小道　小鳥　小道具　小部屋
小声　小舟　小麦　小物　小柄　小型　小口
小判など

これに対して，「長」「短」，「高」「低」，「多」「少」は，ほぼ対応する形で使われる。「大」「小」が主観的な漠然とした大きさを強調して示すのに対して，「長」「短」は時間と距離のN，「多」「少」は数量のN，「高」「低」も数字で測れるような程度や度合を示す場合は，対応して使われると考えられる。しかし，これらの造語力は大きくなく，「高」も主に自然科学や工学などの分野で新造語を作るのに利用されるのみで，日常生活においてはそれほどではない。また以下のように「高」「多」に対応する「低」「少」が使えない例(*)もある。

「長」(チョウ)：長距離　長時間　長期　長髪
「短」(タン)　：短距離短　時間　短期　短髪
「高」(コウ)　：高気圧　高血圧　高品位　高次元　高水準　高性能
高速　高温　高圧　高音　高層　高額　高等　高給　高価
「低」(テイ)　：低気圧　低血圧　低品位　低次元　低水準　？低性能
低速　低温　低圧　低音　＊低層　低額　＊低等　＊低給　＊低価
「多」(タ)　：多数　多量　多種　多民族　多目的　多趣味
「少」(ショウ)：少数　少量　＊少種　＊少民族　＊少目的　＊少趣味

「新」もかなり造語力のある漢字だが，それに対応する接辞的用法の漢字(「古」や「旧」)はあまり使われない。「新」は，いろいろなNについて「新しい」という意味，「何かを始める」という意味を表わすVNについて「新しく，初めて」という意味を添加する。これも「大」と同じく，特別な場合に「新」をつけるのであって，特に対比させる必要がなければ，むしろ何もつけないの

が普通である。

「新」(シン)：＋N　新記録　新製品　新事実　新会社　新技術
新人類など
新型　新式　新茶　新米　新館　新語　新人
新制など
＋VN　新登場　新発売　新開発　新導入など
＋V　新婚　新設　新築　新作　新調　新入　新任など

「悪」も特別な場合にのみ使われる接辞的用法で，反対の場合は何もつけないのが普通だが，慣用的に使われる2字の語で反対の意味を表すものには，「良」「善」のほかに「好」「美」などもある。

「悪」(アク)：悪影響　悪循環　悪平等　悪天候　悪印象など
悪声　悪人　悪意　悪評　悪性　悪質（→AJN）悪化（→VN）
←→美声　善人　善意　好評　良性　良質　←→好転

このような漢字は，1字で形容詞として使われることはないが，単漢字の意味が形容詞的であるとみなせるであろう。[5)]

5. おわりに

以上，形容詞的意味をもつ漢字の接辞的用法について，はなはだ不十分ではあるが，その造語力や運用上の制約について考察してみた。個々の漢字に関して，もっと用例を集める必要があるし，さらに漢字の数も増やして考察を続けていきたいと思う。まだ試案の段階ではあるが，漢字の接辞的用法を外国人学習者に説明するために有効な意味的分類をも考えていく必要があると思っている。

注

(1) 接辞とは何かということで関して，水野（1987）は「独立して用いられることがなく（＝結合形式），語の基幹となる要素（語基）と結合して用いられるもの」と考える。吉村（1987）は，これまでの接辞の定義を検討した上で，絶対的な基準は必ずしも必要ではなく，目的に応じて適宜決めればよいとしている。
(2) 参考文献中の水野（1987）P.63 にある説明を表にしたものが表(1)である。
(3) 参考文献中の吉村（1987）P.107 にある表を表（1）と対照しやすく書き換えたものが表（2）である。
(4) 国立国語研究所（1979）『現代新聞の漢字』秀英出版で，ここに並べた順序はいち

おう使用頻度順で上位1000番までのものである。

（5） 「旧」＝old，「善」「好」＝good などは，英語に訳すと形容詞になる。

参考文献

相原林司（1986）：「不— 無—非—未」『日本語学』 VOL. 5 3月号，明治書院，pp. 67—72

荒川清秀（1986）：「—性 —式 —風」『日本語学』VOL.5 3月号，明治書院，pp.85-91

原田起子（1986）：「—的」VOL.5 3月号，明治書院，pp. 73-80

林 四郎（1978）：「漢字使用の基底構造」『言語行動の諸相』明治書院，pp. 502-517

日向敏彦（1987）：「近代学術用語と漢語」VOL. 6 2月号，明治書院，pp. 37-45

木村英樹（1986）：「—料 —代 —賃 —費（—金）」VOL. 5 3月号，明治書院，pp. 97-104

国立国語研究所 報告56（1976）：『現代新聞の漢字』

水野義道（1987）：「漢語系接辞の機能」『日本語学』VOL. 6 2月号，明治書院，pp.60-69

中川正之（1986）：「—場 —所」VOL. 5 3月号，明治書院，pp. 105-108

野村雅昭（1977）：「造語法」『岩波講座日本語9語彙と意味』岩波書店，pp. 245-284

（1988）：「二字漢語の構造」『日本語学』VOL.7 5月号，明治書院，pp. 44-55

阪倉篤義（1966）：『語構成の研究』角川書店

杉本博文（1986）：「—者 —家」『日本語学』VOL. 5 3月号，明治書院，pp. 92-96

田窪行則（1986）：「—化」『日本語学』VOL. 5 3月号，明治書院，pp. 81-84

豊田豊子（1981）：『よく使われる新聞の漢字と熟語』凡人社

吉村弓子（1987）：「漢子の読み分けにあらわれる統語機能」『日本語学』VOL. 6 8月号，明治書院，pp. 104-112